

これは1971年に僕が行って、自分で撮ってきた足尾銅山です。操業はしていません。そして、二酸化硫黄ですね、亜硫酸ガスで徹底的に駄目になると何が起るか。木が消えて、表土が全部流れます。覆うものがなくなるから全部なくなる。そうすると何が出てくるか。下にあった岩肌がそのまま出てきます。見渡す限り何も無い。人間は自然を痛めつけるところまで平気でやるというものの典型です。それが1971年ですから、今からもう35年前に行き、ここに立ってみて、人間の業というものを非常に強く感じました。そして、それ以来僕は行っていません。でも、この間、ラジオで聞いていたら、とても驚いたのは、これを元にもどすというプログラムをやっている、もう半分以上、元にもどってきています。それで全部、表土を運んでくると、それに植生を戻して、そうすると動物の層まで戻ってくるので、自然に戻るのがもう半分まで来ましたというのをラジオで言っていました。早く、1度見に行きたいなと思います。こういう所を見ると、本当に人間とはこんなにまで業突張りなのかというふうに思います。

これはついこの間行ってきた石見銀山の跡の写真です。とてもおもしろいのは、石積みでテラスになっていますね。山の中でもう人は誰もいません。しかし、この杉の木がいっぱい立っているのですが、よく見ると平らな所だらけが山の上までずっとあるのです。これは何かというと住居があったというしるしです。今からだいたい500年前頃には、岩見の銀山のあたりになんと人口が20万人いたというのです。世界中の銀の3分の1は日本が作っていた。世界中の中国を中心にする、銀本位制を支えていたのは実は日本の銀だった。経済でもちゃんと勉強していて、教えている先生が何人いるか知らないけれども、日本は資源がない、貧乏な国だと学校で教えているけど、嘘です。1960年頃まで日本は世界でも有数の銅の産出国だったのです。ですからステレオタイプに、いい加減なことでいろいろな事を教えたり、みんなの知識を作ったりしてはいけないという事です。日本は16世紀くらいまで金と銀では世界でも有数の国だったのです。今でも光鉾山と言っている九州の住友鉾山の金は、世界中に見て、フタをしてたくらい品質の高いものが出てくる。量はそんなにたくさん出ないけれど、そういう金山を日本は持って

いるのです。

これはまた不思議な話ですが、たたら製鉄というのが出雲でやられています。砂鉄と木炭だけで、玉鋼というのを作ります。日本刀を作るために使います。それはその総作業長の村下という人と写真を撮ったものです。本当に自然に採れるものからだけで、世界中のどこも作れないような品位の高い、純鉄、純粋の鐵ですね、鐵と炭素の合金を作って、それがあまりに良い物だから、日本刀というのは、あんなに良い物ができるのです。こういう所の人というのは又違う考えで、きちんと自然と向き合いながら、仕事をやっています。

7.新工法の開発

新工法の開発。本当はこういう事をやるのを、僕自身は建設機械というのが大好きですので、いろいろないたずらをやってみました。たとえば、これは日立建機と一緒にやった、振動杭打機というもので、杭を打つ時に横振動して、水を吹き出すと無反力で杭が打てるはずだと考えて、基礎実験から何年もかけて磁気実験までもっていきました。全部出来上がったのですが、止まりました。先生のアイデアはいいけど商品性がなくて、市場調査をやったら年に2台しか売れないから止めようということで止まりました。だから、学者先生の趣味でやっているのとあまりろくな事はない。

三菱銀行の本店、ぶっ壊して、今は20階くらいの高層になっています。ただ、生まれてから死ぬまで建物全部みてやろうと思って、やりました。これが古い建物をぶっ壊しているところです。下の方は金庫の跡です。丸の内の東京駅のあたりは、三菱が全部建てましたが、ありとあらゆる所に松杭を打っているのです。松杭の上に建物が乗っていたのです。なかなか抜けないのでそれを引き抜くのが大変なのです。これはその後に行ったもので、大体地表から27メートルくらいの深さの所に仮組のものを作って建てていき、ようやく1979年頃に完成です。

8.事故に学ぶ

今度は事故に学ぶという事を言っておきたいと思います。まず、